

児童生徒の安心感を高める学級経営に関する研究

—生徒指導の4つの視点を生かした児童生徒への働き掛けを通して—

〈生徒指導研究グループ〉

舟山 武¹、菅原 麻衣子²、宇都宮 康弘³、鈴木 ひとみ⁴、泉 順也⁵、木村 真也⁵、齋藤 義彦⁵
七ヶ宿町立七ヶ宿中学校¹、石巻市立住吉中学校²、宮城県石巻商業高等学校³、宮城県立古川支援学校⁴
宮城県総合教育センター⁵

【要約】 本県では、新規不登校児童生徒の出現率の高さが課題である。不登校の未然防止には、児童生徒が学校で多くの時間を過ごす場である学級において、安心を感じることが重要である。本研究は、生徒指導提要以示された生徒指導の実践上の視点である「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の醸成」（以下、4つの視点）を生かし、組織的に学級経営を行うことで児童生徒の安心感を高めることを目指した。研究協力校でワークショップを実施し、協力校教員による働き掛けの実践を行った。実践後、生徒及び教員の「安心チェックシート」の結果や教員へのアンケートの結果などから、安心感の高まりを検証した。

【キーワード】不登校の未然防止、児童生徒の安心感、学級経営、4つの視点、働き掛け

1 はじめに

(1) 主題設定の理由

本県が抱える生徒指導上の課題として、不登校が挙げられる。不登校数を継続数と新規数に分けて見てみると、毎年、多くの不登校児童生徒に改善傾向が見られる一方で、新規の不登校児童生徒が増加している。そのため、全体の不登校児童生徒数に変化が見られない、または増加しているという結果になっている。本県では、「行きたくなる学校づくり」推進事業等、新規不登校児童生徒数の抑制を目指した方策を重視しているところである。

「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省、令和3年10月）では、不登校の主たる要因は「無気力・不安」で、小学校で49.8%、中学校で50.1%である。また、「令和2年度不登校児童生徒の実態調査」（文部科学省、令和3年10月）では、「最初に学校に行きづらいつと感じ始めたきっかけ」について、児童生徒の回答では、「友達のこと」、「先生のこと」、「身体の不調」などの「不安」を起因としたものとなっている。学校生活の中で不安が生じており、教職員にとっても児童生徒にとっても解消が望まれている。

「令和4年度全国学力・学習状況調査宮城県の結果（仙台市を除く）」（宮城県教育委員会、令和4年8月）では、「困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の質問に、「当てはまる」と回答した割合は、小学校31.5%、中学校28.2%であり、低い結果だった。児童生徒にとって、学校にいる大人に対し、いつでも相談できる環境が整っていることは、安心して学校生活を過ごすための大切な要素である。学級を基盤とする学

習や生活の中で、児童生徒が持っている力を発揮できるように、教職員は児童生徒理解を深め、一人一人に応じた指導を行うことが求められる。そうした関係の中で、児童生徒の安心感を高められるようにすることが必要である。さらに、学校においては、教職員の支援により、児童生徒の自己実現のために自己指導能力の獲得が求められている。

生徒指導提要（令和4年12月）では、児童生徒の自己指導能力の獲得を支える、生徒指導の実践上の視点として「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の醸成」（以下、4つの視点という）が挙げられている。これらの4つの視点を生かした働き掛け、すなわち、「迷惑と思われるかもしれない発言をしても、この組織なら大丈夫だと思える、発信することへの安心感を持てる状態をつくり出す」「悩みが生じたときに、すぐに話を聞いてもらえるような気軽に相談できる体制をつくる」「困ったときには先生に相談したいという気持ちを生み出す」「根気強く日常の安全確保に努める取組を行う」等を行えば、児童生徒の安心感が高まり、自己指導能力の獲得につながると考えた。

生徒指導提要では、「組織的かつ効果的に生徒指導を実践するためには、教職員同士が支え合い、学び合う同僚性が基盤」とも記されている。また「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」（文部科学省、平成27年12月）では、「校長のリーダーシップの下、チームを構成する個々人がそれぞれの立場や役割を認識しつつ、情報を共有し、課題に対応していく必要がある」と示されている。様々な視点で多くの教員が共通理解の下に、児童生徒に関わり、学級担任を中心として学級

経営を展開していく必要があると考えた。

以上のことから、学級担任だけでなく、学級に関わる教員が相互に学び合い、支え合いながら学級経営を行う中で、4つの視点を生かして働き掛けることで、児童生徒の安心感が高まるのではないかと考え、本主題を設定した。

(2) 研究の目標

児童生徒の学級での安心感を高めるために、学級経営において、学級に関わる全教員による生徒指導の4つの視点を生かした働き掛けが有効であることを、実践を通して明らかにする。

(3) 目指す児童生徒の姿について

4つの視点を基に、目指す児童生徒の姿を次のように設定した（表1）。

表1 目指す児童生徒の姿

4つの視点	目指す児童生徒の姿
自己存在感の感受	教師や仲間から学級の一員として認められているという安心感を持つ児童生徒
共感的な人間関係の育成	教師や仲間から理解され、受け入れられているという安心感を持つ児童生徒
自己決定の場の提供	自分の考え、選択、決定が尊重されているという安心感を持つ児童生徒
安全・安心な風土の醸成	ルールが守られ、他者から傷つけられないという安心感を持つ児童生徒

2 教員実態調査

4つの視点に基づいた取組について、教育現場の現状と課題を把握することを目的とし、令和4年7月25日（月）から令和4年8月10日（水）の期間で調査を行った。対象は宮城県総合教育センター主催の研修会参加者、生徒指導研究グループの所属校教員及び長期研修員とした（n=353）。校種は小学校（134名）、中学校（93名）、高等学校（62名）及び特別支援学校（64名）である。教職経験年数別回答数は、5年以内163名、6～10年57名、11～20年71名、21年以上62名である。回答項目は、「よくしている」「どちらかといえばしている」「あまりしていない」「していない」「よく分からない」の5つとした。教員実態調査質問項目は以下のとおりである（表2）。

表2 教員実態調査質問項目

視点	質問項目
存在	学級の活動の場面で、児童生徒が自分も一人の人間として大切にされているという自己存在感を感じられるような働き掛けをしていますか。
共感	学級の活動の場面で、児童生徒同士がお互いを理解し尊重し合える人間関係を育成するような働き掛けをしていますか。
決定	学級の活動の場面で、自分で考え、選択したり、決定したりする場や機会を与えるような働き掛けをしていますか。
安全	学級の活動の場面で、児童生徒が学校や学級のルールを理解し、自主的に守るような働き掛けをしていますか。

(1) 結果

4つの視点全てにおいて、「よくしている」「どちらかといえばしている」という肯定的な回答はいずれも88.9%を上回る結果であった。しかし、「効果の見られた具体的な取組」への質問に、具体的な取組の記述があった割合は53.5%と、約半数だった。記述のなかった回答者への聞き取りでは、「無意識に行っているため、具体的な記述ができない」などの意見が多かった。

一方、具体的な取組の記述があった割合を教職経験年数ごとに見ると、5年以内36.2%、6～10年70.2%、11～20年74.6%、21年以上59.7%であった。教職経験年数5年以内の教員に対する聞き取りでは、「経験が少なく、積み重ねてきた実績があまりない」「実践例の知識が乏しい」「同僚の教員に具体的な取組について相談する機会があまりない」との回答があった。

(2) 考察

多くの教員が、4つの視点に基づいた取組を実践しているにもかかわらず、その取組が無意識に行われていることが分かった。意識化することで指導の明確化を図り、それを共有することで経験が少ない教員も具体的な働き掛けができるのではないかと考える。そのためには児童生徒の実態を全教員で把握、共有し、取組について教員同士で話し合い、考え、意識して実践していくことが必要である。

3 実践研究に向けて

児童生徒の安心感を高めるために、児童生徒理解を基に、教員が4つの視点を生かした働き掛けを考え、意識して実践していく体制を整える必要がある。そのため、実践をサポートするものとして、次の4つのツールを作成した。

(1) 安心チェックシート

安心チェックシートは、4つの視点を基に、学級で児童生徒の安心感の状態、教員の働き掛けの意識の状態について調査し、結果を数値化する。学級の状態を把握できるとともに、働き掛けを考える際の一助となるものである。4つの視点ごとに5つの質問項目を設定する。回答は「そう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4件法とし、「そう思う」が最も児童生徒の安心感の高い状態、教員の働き掛けに対する意識の高い状態を示す。児童生徒及び教員に調査を行う際は、20項目をランダムに並べ替え実施する。児童生徒及び教員の結果を、4つの視点及び質問項目ごとに集計する。

(2) 働き掛けヒント集

働き掛けヒント集は、4つの視点を生かして、児童生徒の安心感を高める働き掛けを教員が考える際に活用するものである。働き掛けの意義や目的についてヒントを示し、個々の児童生徒に合わせた適切な働き掛けを考えるための一助とする。

(3) 共有ワークシート

共有ワークシートは、児童生徒の安心感を高める働き掛けについて、学級に関わる全教員で意見を出し合い、共有し、働き掛けを決定していく際に活用するものである。

(4) ワークショップ

ワークショップは、教員が4つの視点と生徒の安心感について理解し、組織で意識して児童生徒に働き掛けていく体制づくりを行うものである。安心チェックシート、働き掛けヒント集、共有ワークシートを4つの視点を生かした働き掛けを考えていくために使用する。

4 実践研究

(1) 実践内容

① ワークショップ

ア 目的

児童生徒の安心感を高める働き掛けについて、学級に関わる全教員が生徒指導の4つの視点を生かして考え、共有し、目的意識を持った実践につなげることを目的とする。

イ 対象

A中学校、B中学校の2校の協力校教員を対象に実施した。実施日は次のとおりである。

(7) A中学校

期日 令和4年10月3日（月）

(4) B中学校

期日 令和4年10月5日（水）

ウ 事前準備

事前に安心チェックシートによる調査を実施した。その後、学年、学級、生徒及び教員の調査結果を、ワークショップ実施1週間前に協力校に配布した。その際、研修員によって抽出した学級を協力校教員に伝えた。抽出学級数はA中学校3学級、B中学校1学級とした。

エ 内容

(7) 実態把握

抽出学級の課題を明確にするために、事前に配布された調査結果を持ち寄り、話し合いを行った。抽出学級及び生徒の安心感の状態について、実態を把握した上で、4つの視点から課題となる視点を設定し、共有を行った。各学級の課題として設定した視点は次のとおりである（表3）。

表3 課題として設定した視点（A・B中学校）

学校	学級	課題として設定した視点
A中学校	学級①	安全・安心な風土の醸成
	学級②	安全・安心な風土の醸成
	学級③	自己決定の場の提供
B中学校	学級④	安全・安心な風土の醸成

(4) 具体的な働き掛けの決定

始めに「安心感を高める働き掛け」について意見を出し合い、各教員の様々な考え方を共有した。次

に、組織で取り組む意識付けのために、各グループで「グループの行動目標」（表4）を設定した。最後に働き掛けヒント集や、教員の意見を参考にしながら、「個人の行動目標」を決定し、個人として働き掛けていくことを明確にした。

表4 グループの行動目標

学級	視点	グループの行動目標
学級①	安全	「間違いは、学び」という意識・視点を持たせる。
学級②	安全	(1)学級の課題の周知 (2)共有（出来事、人の心や体を傷つけるような言葉、行為） (3)教師の共有、連携
学級③	決定	一人一人の役割を明確にして、意見の発表の機会を設ける。
学級④	安全	教員が授業開始前に教室で生徒を迎える体制を取る、子どもの権利を意識する。

(4) まとめと共有

各グループでグループの行動目標を確認し、その後、個人の行動目標を発表した。実践をしていくに当たり、互いの働き掛けを共有することで、グループとして取り組む意識付け、働き掛けの情報共有、働き掛けの改善が適切に行われることを目指した。

オ 成果

ワークショップ後に振り返りのアンケートを行った。回答はそれぞれ4件法で行った。質問内容とその結果は次のとおりである（図1）。

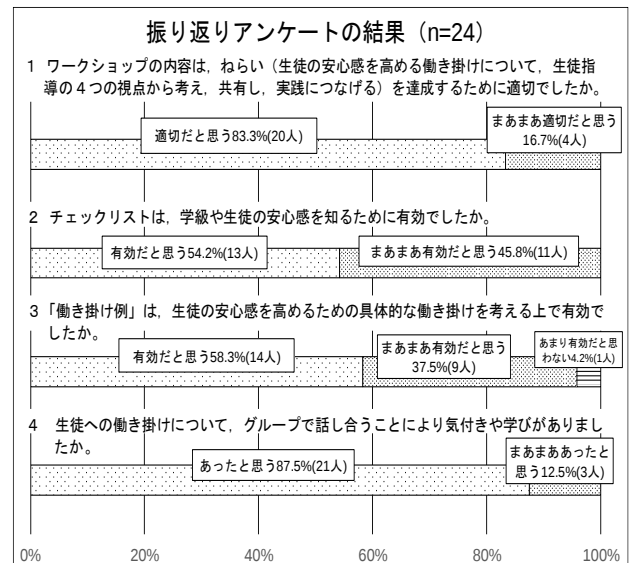


図1 振り返りアンケートの結果

記述の回答では、「安心チェックシートは、自分自身で感じていた弱点について、生徒も不安を感じているということが数字で表参考になった」「学年全体の課題となっていたことが早急に取り組まなければならないことだと再認識し、話し合うことができたことは良い機会であった」「様々な視点での意見交換は、視野を広げる良いきっかけとなった」などがあった。また聞き取りでは、「共有ワークシートがあることにより、他の先生の考えを知ることができ参考になった」「共有ワークシートを使用することで、流れに沿って働き掛けを考えていくことができた」などの意見があった。

カ 考察

ワークショップについては、「生徒への働き掛けについて、グループで話し合うことにより、気づきや学びがありましたか」という質問に対し、教員の肯定的な回答が100%であったことから、生徒指導の4つの視点を生かした働き掛けについて考え、共有するきっかけとなった。

記述の回答から、安心チェックシートの活用は単に生徒の安心感の状態や教員の働き掛けに対する意識を確認するだけではなく、生徒と教員の感じ方を対比させることで、早急に取り組まなければならないことを認識することにつながるということが分かった。

共有ワークシートの活用は、他の教員の考えを知ることができ参考になったとあることから、教員が把握している生徒の実態や働き掛けの方法等の様々な情報を基に、より効果的な働き掛けを考えることにつながっていた。

以上のことから、ワークショップは児童生徒の安心感を高める働き掛けについて、学級に関わる全教員が生徒指導の4つの視点を生かし考え、共有し、目的意識を持った実践につなげていくことに有効であると分かった。

② 協力校教員による実践（6週間）

ワークショップ後に、協力校教員による働き掛けの実践を行った。2週間ごとに自身の働き掛けを振り返るとともに、翌週から実践する働き掛けを見直した。

(2) 実践研究の結果と考察

① 結果

ア 安心チェックシートによる調査結果

6週間の実践を終え、学級での生徒の安心感の状態や変容及び教員の働き掛けに対する意識の変容を調査するために、生徒及び教員に対し安心チェックシートによる調査（2回目）を実施した。質問項目は、各視点5項目ある。回答について「そう思う」を4、「少しそう思う」を3、「あまりそう思わない」を2、「そう思わない」を1と数値化し、課題として設定した視点について平均値を算出した。抽出された4学級（表3、4）のうち、生徒と教員の数値に増加が見られた学級①と、生徒と教員の数値の減少が3学級の中で最も大きかった学級④の生徒の結果（表5）、教員の結果（表6）は次のとおりである。

表5 安心チェックシートによる調査結果（生徒）

学級	視点	1回目	2回目
学級①(n=26)	安全	3.32	3.35
学級④(n=10)	安全	3.30	2.92

表6 安心チェックシートによる調査結果（教員）

学級	視点	1回目	2回目
学級①(n=4)	安全	3.45	3.70
学級④(n=10)	安全	3.70	3.56

イ 協力校教員との情報共有

協力校教員による働き掛けにより、生徒にどのような変容が見られたかを把握するために、2週間ごとにスプレッドシートを用いて研修員と協力校教員とで情報の共有を行った。学級①、④での協力校教員の働き掛けと実践を通して気付いた教員から見た生徒の様子についての記述は次のとおりである（表7）。

表7 教員の働き掛けと教員から見た生徒の様子

学級	視点	協力校教員の働き掛け（個人）	教員から見た生徒の様子
学級①	安全	あらゆる場面で、失敗を恐れないような気持ちになる声掛けを行う。	周りの生徒と協力して課題に取り組む際に、以前より自信を持って自分の考えを表出するようになってきたと感じる。
		発表をした生徒を称賛し、励まし、考えの根拠やプロセスを拾う。	授業において少しだけ挙手をする生徒が増えた。
学級④	安全	帰りの会のスタート時間をタイマーでセットし、黒板に明示する。	生徒の中から声掛けが生まれ、時間を意識する雰囲気が作られ始めた。また、学級に伝えたいことを、朝、黒板に生徒が記入し、連絡するようになった（図2）。
		テスト前は、毎回生徒の気持ちが不安定になる時期のため、廊下ですれ違ったときや休み時間を活用しながら、コミュニケーションを取る場面を積極的に作る。	テスト前は不安での保健室への来室が多かったが、今回の期間の来室はなかった。また、少しずつでも毎日会話を積み重ねることで、こちらから聞くことがなくても話をしてくれる生徒も見られた。

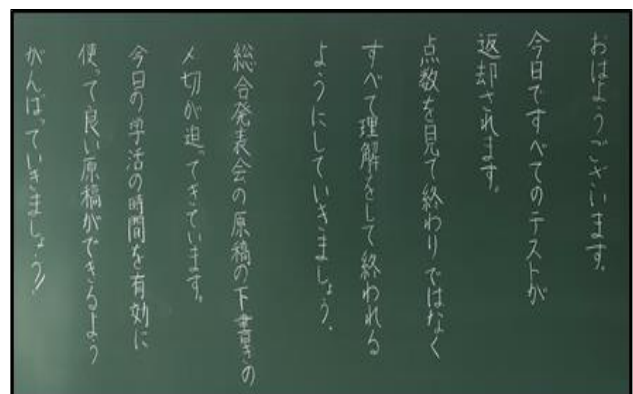


図2 「学級への連絡」（生徒が黒板に記入）

ウ 協力校教員への実践後アンケート及び聞き取り

実践を通して教員から見た学級の様子や気づきについて把握するために、6週間の実践を終えた協力校教員にアンケート及び聞き取りを実施した。学級①、④の教員から見た学級の様子（表8）、教員の気

付き（表9）は次のとおりである。

表8 教員から見た学級の様子

学級	教員から見た学級の様子
学級①	・学級の誰もが安心して生活するために、けがなどのトラブルが起こらないように、日々の行動に注意を払うよう意識が変わっていったように思う。 ・何を発言してもよいという雰囲気が学級の中に生まれたように感じる。
学級④	・どのようにしたら「自分」ではなく「学級」が変化していくかなど、集団意識が生まれ始めた。 ・授業中や考査前の休み時間に自分から分からないところを聞きに来る生徒が増え、学習習慣や学習意欲につながったと思う。

表9 教員の気付き

学級	教員の気付き
学級①	・今まで無意識的にやっていたことを意識することで、自分のやるべきことが整理された。
学級④	・実践を通して、これまでの指導はまだまだ足りないのだと感じた。 ・教員同士の声掛けやアドバイスを定期的に行われるようになったことも成果であった。

② 実践研究における考察

ア 学級①について

(7) 安心チェックシートによる調査結果から

安心チェックシートによる調査結果（表5，6）で、2回目の教員と生徒の数値に、ともに増加が見られた。教員の働き掛けの意識が高くなることで、児童生徒の安心感を高めることにつながったのではないかと推察する。

(イ) 教員の働き掛けと教員から見た生徒の様子から

教員の働き掛けと教員から見た生徒の様子（表7）に「あらゆる場面で、失敗を恐れないような気持ちになる声掛けを行う」という働き掛けを通し、生徒の様子として「周りの生徒と協力して課題に取り組む際に、以前より自信を持って自分の考えを表出するようになったと感じる」との記述がある。また、「発表をした生徒を称賛し、励まし、考えの根拠やプロセスを拾う」という働き掛けを通し、生徒の様子として「授業において少しでも挙手をする生徒が増えた」との記述もある。教員の働き掛けにより、生徒の発表への抵抗感が軽減され、発表に対する自信を生むきっかけとなった。安心感を醸成する一要素となったと考えられる。

(ウ) 教員から見た学級の様子から

教員から見た学級の様子（表8）に「学級の誰もが安心して生活するために、けがなどのトラブルが起こらないように、日々の行動に注意を払うよう意識が変わってきたように思う」「何を発言してもよいという雰囲気が学級の中に生まれたように感じる」との回答がある。自分だけではなく他者のことを考え、行動しようとするなど、規範意識が生まれていた。また、他者を受け入れようとする受容的態度も見られるようになっていた。実践期間中の生徒の出席状況を確認すると、新規の不登校生徒は出現していなかった。

(I) 教員の気付きから

教員の気付き（表9）で、「今まで無意識的にやっていたことを意識することで、自分のやるべきことが整理された」との記述がある。今回の実践が、これまで無意識に行ってきたことを意識化し、指導内容を明確にする機会となったと考えられる。

(ウ) ここまでの考察から

安心チェックシートによる調査結果（表5，6）で、2回目の教員と生徒の数値に、ともに増加が見られた。「今まで無意識的にやっていたことを意識することで、自分のやるべきことが整理された」（表9）とあるように、教員が指導を意識的に行えるようになったことが関係していると考えられる。また、生徒に規範意識や受容的態度が見られたことから、生徒の発言を認める、称賛するという積極的な働き掛けにより、生徒の発言することに対する安心感が生まれたのではないかと推察する。

イ 学級④について

(7) 安心チェックシートによる調査結果から

安心チェックシートによる調査結果（表5，6）で、2回目の教員と生徒の数値に、ともに減少が見られた。ワークショップ後に行った振り返りアンケートの結果（図1）や記述の回答では、教員が目的意識を持った実践につなげることができたと考えられることから、実践期間中の協力校教員の様子や生徒の様子が多様なものであったのかに着目する必要がある。

(イ) 教員の働き掛けと教員から見た生徒の様子から

教員の働き掛けと教員から見た生徒の様子（表7）で、「帰りの会のスタート時間をタイマーでセットし、黒板に明示する」という働き掛けを通し、生徒の様子として「生徒の中から声掛けが生まれ、時間を意識する雰囲気が作られ始めた」と記述がある。教員の働き掛けが、生徒の中で時間を守ろうとする規範意識を育む一要素となっていた。図2のように、学級に連絡したいことを、朝、黒板に記入する生徒の姿が見られるようになった。教員の指示ではなく、自ら考え、行動に移すという主体的な活動へとつながっていた。また、「テスト前は、毎回生徒の気持ちが高ぶる時期のため、廊下ですれ違ったときや休み時間を活用しながら、コミュニケーションを取る場面を積極的に作る」という働き掛けを行ったことで、これまでテスト前に多かった不安での保健室への来室がなくなり、教員の働き掛けが、生徒の不安の軽減につながったことが分かった。

(ウ) 教員から見た学級の様子から

教員から見た学級の様子（表8）で、「どのようにしたら『自分』ではなく、『学級』が変化していくかなど、集団意識が生まれ始めた」との回答がある。生徒自身が学級の一員であるという自覚や意識が生まれてきたのではないかと推察する。このような意識が高まることは、自分の役割を見だし、そ

れを果たすための主体的な行動につながっている。
また、「授業中や考査前の休み時間に自分から分からないところを聞きに来る生徒が増え、学習習慣や学習意欲につながったと思う」と回答がある。安心感を高める教員の働き掛けが、生徒の学習習慣や学習意欲にも良い影響を与えることが分かった。実践期間中の生徒の出席状況を確認すると、新規の不登校生徒は出現していなかった。

(イ) 教員の気付きから

教員の気付き（表9）で、「実践を通して、これまでの指導はまだまだ足りないものだと感じた」との記述がある。協力校教員にとって、今回の実践は、これまでの自身の指導を振り返り、課題を見付け出す機会となったと考えられる。

(オ) ここまでの考察から

安心チェックシートの結果（表5、6）で、2回目の教員と生徒の数値に、ともに減少が見られたが、「実践を通して、これまでの指導はまだまだ足りないものだと感じた」（表9）とあるように、教員が自身の指導を見直すなどの内省が生じたことが関係していると考ええる。また、生徒が学級への連絡を自主的に行うようになったことから、学級の課題を解決するために行動していたのではないかと推察する。学校生活アンケートを参考にし、生徒が学校に対してどのように感じているかを見てみると、「学校は楽しい」と回答した生徒が、実践前の9月と実践後の11月では2名増加していた。安心チェックシートの結果（2回目）で、生徒と教員の数値が減少していたことは、集団としてより高い意識を持ち、厳しい視点で捉えたためではないかと思われる。

ウ 学級①と学級④から

実践中の協力校教員と研修員による情報共有や実践後アンケート、聞き取りにより、規範意識、受容的態度の育成、不安の軽減、主体性などが読み取れた。教員の意識的な働き掛けにより、学級①と学級④の両方とも「安全・安心な風土の醸成」の視点で目指す生徒の姿として設定した「ルールが守られ、他者から傷付けられないという安心感を持つ児童生徒」に近づくことができた。さらに、受容的態度や主体性も育まれていることから、他の視点「自己存在の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」にも波及した。教員が意識して児童生徒に働き掛けていくことで、教員の気付きや、それに伴った働き掛けの改善につながり、その行動が、生徒の安心感を高めることにつながったと考える。

5 おわりに

(1) 研究の成果

①学級経営において、今まで無意識に行っていたことを意識することで、教員個々のやるべきことが整理された。また、教員同士の声掛けやアドバイスが

多く見られるようになった。

②教員同士で目指す生徒像を意識し、共有した働き掛けを行ったことが、生徒の集団意識を高める契機となった。

③4つの視点において、重点的に行う視点を設定したことで、教員のやるべきことがより明確になり、実践への意識が高まった。

④4つの視点において、重点的に行う視点を設定し、働き掛けを行ったことで、生徒の様子として、規範意識や受容的態度、不安の軽減、主体性などが見られた。設定した視点での働き掛けが、他の視点へも波及した。また、生徒の学習に対する意欲の向上にもつながった。

⑤学級①、学級④とも実践した期間中に新規の不登校生徒は出現しなかった。教員による4つの視点を生かした働き掛けが生徒の安心感の高まりにつながったため、不登校の未然防止に一定の効果があつた。

(2) 今後の課題

①教員の働き掛けによる児童生徒の安心感を高めることを目指したが、今後は、児童生徒自身が主体となって、安心できる学級づくりが展開されるような働き掛けを考えていく必要がある。

②4つの視点から学級の課題となる視点を設定し、働き掛けを考え、実践してきた。今後は、児童生徒それぞれの安心感の状態にも目を向け、個に応じた視点を設定し、働き掛けを考えていく必要がある。

③本県において小学校、高等学校においても不登校出現率が高い状況が続いている。不登校の未然防止のため、本研究を小学校、中学校及び高等学校に広めていく必要がある。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省：「生徒指導提要」，2022
- 2) 宮城県教育委員会：「令和2年度『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』（宮城県分）」，2021
- 3) 文部科学省：「令和2年度『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』，2021
- 4) 宮城県教育委員会：「平成30年度『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』（宮城県分）」，2019
- 5) 宮城県教育委員会：「令和2年度における宮城県長期欠席状況調査」，2021
- 6) 宮城県教育委員会：「令和4年度全国学力・学習状況調査宮城県の結果」，2022
- 7) 文部科学省：「令和2年度不登校児童生徒の実態調査」，2021
- 8) 文部科学省：「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」，2015

【図表等の許諾について】

図2は、生徒が黒板に書いた学級に向けてのメッセージである。氏名を伏せて掲載することとし、所属校長から使用許諾を得た。

児童生徒の安心感を高める学級経営に関する研究 ～生徒指導の4つの視点を生かした児童生徒への働き掛けを通して～

令和4年度 生徒指導研究グループ

七ヶ宿町立七ヶ宿中学校
宮城県石巻商業高等学校
宮城県総合教育センター

舟山 武
宇都宮 康弘
泉 順也 木村 真也 齋藤 義彦

石巻市立住吉中学校
宮城県立古川支援学校
菅原 麻衣子
鈴木 ひとみ

児童生徒の実態

〔令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（宮城県分）より〕
・不登校児童生徒数が高水準で推移 ・新規不登校児童生徒の出現 ・不登校の要因は「不安」が1位
〔令和2年度不登校児童生徒の実態調査より〕
・「最初に学校に行きづらいつと感じ始めたきっかけ」についての回答
…「友達のこと」、「先生のこと」、「身体の不調」などの「不安」に起因している
〔令和4年度全国学力・学習状況調査宮城県の結果（仙台市を除く）より〕
・「困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」に対し、「当てはまる」と回答した割合
…小学校31.5%，中学校28.2%

本県の課題

・小学校・中学校・高等学校における不登校の未然防止
・児童生徒の不安を軽減あるいは解消し、安心感を高めること
・児童生徒が「先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」と感じられる関係づくり

研究目標

児童生徒の学級での安心感を高めるために、学級経営において、学級に関わる全教員による生徒指導の4つの視点を生かした働き掛けが有効であることを、実践を通して明らかにする。

調査研究

○文献研究
・学級経営について
・不登校の未然防止について
・安心感について
・生徒指導の4つの視点について
○教員実態調査
対象：宮城県総合教育センター研修会参加者、生徒指導研究グループ所属校教員及び長期研修員（n=353）
内容：生徒指導提要で示されている、生徒指導上留意する4つの視点での働き掛けに関するアンケート
結果：88.9%が4つの視点に基づいた働き掛けを実践している。
⇒しかし、「効果の見られた具体的な取組」への質問に、具体的な取組の記述があった割合は53.5%であった。また、教職経験年数ごとでは、教職経験年数5年以内の教員が36.2%であった。
理由：・無意識に行っているため、具体的記述ができない。
・実践例の知識が乏しく、同僚の教員に具体的な取組を相談する機会もあまりない。

実践研究

○協力校教員による実践
○ワークショップ
① 実態把握
② 視点を1つに絞り、目標・具体的な働き掛けの決定
③ まとめと共有
○事前準備
① 安心チェックシートでの調査（生徒・教員）
② 安心チェックシートの集計、分析⇒学級の抽出
○実践に向けて作成
① 安心チェックシート…生徒指導の4つの視点に基づいて作成。児童生徒の実態把握及び変容の確認として使用。
② 働き掛けヒント集…働き掛けの意義や目的について提示。働き掛けを具体化するために使用。
③ 共有ワークシート…思考を整理、視覚化、共有、働き掛けを意識化する際に使用。

検証

ワークショップ後、教員による実践を行ったのちに、以下の方法で検証を行う。
① 2回目の安心チェックシートの実施。各項目の数値の変化から児童生徒の安心感の高まりを調査。
② 協力校教員に実践後アンケート及び聞き取り調査の実施。学級の様子や教員の意識の変容について調査。

成果

○ 教員同士の声掛けやアドバイスが多く見られるようになった。
○ 教員同士で目指す生徒像を意識し、共有した働き掛けを行ったことで、生徒の集団意識を高める契機となった。
○ 4つの視点のうち、重点的に行う視点を設定したことで、教員のやるべきことがより明確になり、実践への意識が高まった。
○ 協力校教員による実践を行った結果、生徒の様子として、規範意識や受容的態度、不安の軽減、主体性などが見られた。設定した視点での働き掛けが、他の視点へも波及した。また、学習意欲の向上にもつながった。
○ 教員の4つの視点を生かした働き掛けが、生徒の安心感の高まりにつながり、不登校の未然防止に一定の効果があった。

目指す 児童生徒の姿

自己存在感の感受 教師や仲間から学級の一員として認められているという安心感を持つ児童生徒
共感的な人間関係の育成 教師や仲間から理解され、受け入れられているという安心感を持つ児童生徒
自己決定の場の提供 自分の考え、選択、決定が尊重されているという安心感を持つ児童生徒
安全・安心な風土の醸成 ルールが守られ、他者から傷つけられないという安心感を持つ児童生徒